絶句（送別・望郷）　―　現代語訳　―

送（ル）二元二使（ノ ヒスルヲ）一安西（ニ）　　王　維

渭城の朝の雨は街道の土ぼこりをしっとりと濡らしてくれた。
旅館（はたご）の辺りの柳は青々として、みずみずしい色を新たにしている。
さあ君よ、もう一杯この酒を飲み干したまえ。
西に進み、関陽を出てしまうと、もう親しい友はいないのだから。

勧酒　　于武陵

君に勧めよう、この黄金の杯を。
なみなみと注いだこの酒を君よ断らないでくれ。
花がひらけばいつでも雨あめ風かぜが吹き散らす、
人生も、別れればかりが続くのだ。

涼州詞　　王翰

葡萄の美酒を夜でも光り輝く玉の杯で、
今しも飲もうとすると、（誰かの演奏する）琵琶の音が（私を）せきたてるように馬上でおこる。
酔って戦場となった砂漠の砂に臥し倒れようとも、君よ私を笑ってくれるな。
昔から遠征して戦った者は、いったい幾人無事に戻ってくることができただろうか（いや、どれほども無事に戻ってきてはいない）。

静夜思　　李　白

（夜が更けて辺りは静かであるが、旅先の身ではなかなか寝つけない。そこで起き上がり）
ふと寝台の前を見ると月の光が明るく差し込んでいる。
その月の光は白々としているので、（もう秋も深まっていることゆえ、初めは）おや、地上に降った霜ではないかと思ったほどであった。
（だが、よくよく見たら、霜ではなかった。そこで）頭を上げて山の端に昇っている月を仰ぎ見た。
（するとおのずと故郷のことが思い起こされて、旅愁がひしひしと胸に迫り）頭はいつともなくうなだれて、（私はいつか）懐郷の念に浸っているのであった。